

(5) (俵博士記念資金)	前年度より繰越	133.32	賞状用紙及揮毫料 賞状用紙及揮毫料 受賞者招待費 印刷費 雑費	200.00	
	基本公債利子	215.00		7.00	
	銀行預金利子	1.00		10.00	
				40.00	
				15.00	
			小計	272.00	
			次年度へ繰越高	77.32	
	計	349.32	計	349.32	
(6) (河村博士寄贈資金)	前年度より繰越	1,728.40	次年度へ繰越高	1,986.40	
	基本信託收益	258.00			
	計	1,986.40		計	1,989.40
(7) (野田文庫資金)	前年度より繰越	24,900.59	圖書室設備費 圖書購入費 圖書目録印刷費 雜費	1,700.00	
	基本信託金收益	3,800.00		2,000.00	
	銀行利子	480.00		600.00	
	振替貯金利子	15.00		300.00	
			小計	4,600.00	
			次年度へ繰越高	24,595.59	
	計	29,195.59	計	29,195.59	
(8) (日本鋼管會社) (日本贈鋼管會社)	前年度より繰越	16,268.06	研究部會費 講演及會費 俸給及會手 印刷通信費 通雜費	8,000.00	
	基本信託金收益	3,800.00		2,000.00	
	同公債利子	3,500.00		3,000.00	
	同社債利子	4,200.00		1,000.00	
	銀行利子	300.00		1,000.00	
			小計	15,100.00	
			次年度へ繰越高	12,968.06	
	計	28,068.06	計	28,068.06	
(9)甲 (日本特殊鋼會社) (日本特贈鋼會社)	前年度より繰越	735.77	賞牌製作費 同賞副賞金 賞状印刷費 受賞者招待料 雜費	18.00	
	基本信託收益	760.00		300.00	
	銀行利子	15.00		500.00	
				90.00	
				12.00	
				30.00	
				15.00	
			小計	965.00	
			次年度へ繰越高	545.77	
	計	1,510.77	計	1,510.77	
(9)乙 (日本特殊鋼會社) (日本特贈鋼會社)	前年度より繰越	5,199.67	次年度へ繰越高	6,411.67	
	基本信託收益	1,140.00			
	銀行利子	72.00		計	6,411.67
	計	6,411.67			
(10) (會館建設資金)	前年度より繰越	5,335.14	次年度へ繰越	19,555.14	
	基本信託收益	200.00			
	鐵鋼資料編纂資金繰入	14,000.00		計	19,555.14
	計	19,555.14			
(11) (今泉博士記念資金)	前年度より繰越	4,698.48	研究援助金	2,000.00	
	基本信託收益	1,750.00		小計	2,000.00
	社債利子	2,140.00		次年度へ繰越高	6,678.48
	銀行利子	90.00			
	計	8,678.48	計	8,678.48	

購入圖書 和書 3 冊
野田文庫購入圖書 和書 10 冊 洋書なし
以上報告候也
昭和 18 年 4 月 3 日
社團法人 日本鐵鋼協會
會長 理事 松下長久

IV 表彰式

此の日名譽の表彰を受けられた方々次の通り。

第 13 回 服部賞受領者

服部賞牌受領者

日本製鐵株式會社八幡製鐵所理事 理學士 田澤敏次郎君

服部賞金受領者

株式會社神戸製鋼所線材課長 副參事 岩屋 稔彦君
海軍技術研究所材料研究部 佐藤 昇君
日本製鐵株式會社富士製鋼所技師 製鋼掛長 穗坂徳四郎君
株式會社日立製作所若松工場鑄造課長 工學士 宮下格之助君
日本製鐵株式會社八幡製鐵所技師 工學士 八木貞之助君

第 10 回 香村賞受領者

香村賞牌受領者

日本砂鐵鋼業株式會社 取締役 工學士 上野建二郎君
香村賞金(第九條適用)受領者
株式會社昭和製鋼 ドクトル, オブ 有山 恭藏君
所研究所副研究員 フィロンファイ
日本製鐵株式會社八幡製鐵所鍛冶職職長 梶原 林次君

株式会社日本製鋼所室蘭製作所職員 關 米助君
 株式会社昭和製鋼所 工學士 原田 靜夫君
 株式会社昭和製鋼所研究所次長 工學士 藤田守太郎君

第9回 俵賞受領者

技術上優秀論文 (平爐に於ける珪石煉瓦の損傷原因と白珪石製珪石煉瓦の製造に関する研究)
 鞍山高級耐火材料株式会社技術部長 大野田 剛君
 學術上優秀論文 (電氣爐によるフェロマンガンの製造の研究)
 日本鋼管株式会社電氣製鐵所長 工學博士 工學士 笹部 誠君
 兼建設部電氣製鐵所支部長參事

第5回 渡邊賞受領者

渡邊賞牌受領者

株式会社日本製鋼所室蘭製作所參事 工學士 黒川慶次郎君
 渡邊賞金受領者

日本特殊鋼株式会社 技師 阿部七三郎君
 日本製鐵株式会社八幡製鐵所 技師 入江 仁壯君
 日本特殊鋼株式会社 技師 塚本 榮一君
 吳海軍工廠製鋼部鍛工長 本田登喜二君

表彰者推薦理由書

服部賞牌受領者

日本製鐵株式会社八幡製鐵所理事
 理學士 田澤敏次郎君

君は大正6年東北帝國大學理學部化學科を卒業し、2箇年間東京帝國大學に於て俵教授の計に日本刀の研究に従事して材料中の微量含有物を検定し、後八幡製鐵所研究員となり爾來20餘年間孜孜として分析研究に従事して製鐵工業の發展に努め、副産物の利用法鐵鋼の分析法特に日本標準規格の制定調査に盡力するところ甚大にして遂に22種に互る日本鐵鋼標準試料の製造を完成し之によりて鐵鋼關係化學分析の基礎を確立し、本邦鐵鋼業に貢獻するところ極めて顯著なり。

仍て同君は服部博士記念資金取扱規則第七條に據り服部賞牌を受くる資格充分なるものと認む。

服部賞金受領者

株式会社神戸製鋼所線材課長

副參事 岩屋 稜彦君

君は大正8年熊本高等工業學校機械科を卒業し、直ちに八幡製鐵所に奉職し、主として小形條鋼、線材の壓延作業に従事せり、次で昭和4年神戸製鋼所に轉じ、技術的に改善を要すること多き線材の製造作業に従事したり、即ち當時其の作業の困難なると採算上の點より顧られざりし5番線材(太さ5.5mm)の壓延作業開始に當り銳意之が製造技術の刷新向上を計り、同時に當時専ら輸入に依存せし諸鋼索用硬鋼線材を製造するに及び同社淺田長平氏指導の下にその製造研究に挺身従事し、幾多技術的困難に遭遇せしも良く之を克服し優良品の製出に成功し、本邦に於ける硬鋼線材の國産化を見るに到れり。

昭和8年半連続式新線材工場を新設し、之に依り此の種鋼索用たる炭素量0.60%の硬鋼線材の多量生産の基礎を作り、新壓延機の操業技術の確立に貢獻し更に炭素量0.70%以上の特殊硬鋼線材の製造研究に着手し銳意之れが製作に努め最近に到りては輸入不可能となり瑞典材に匹敵する「ピアノ」線材の工業的製作に成功し、極めて良好なる成績を挙げつゝあり。

之を要するに同君は本邦硬鋼線材製造に對し技術上の進歩發達に貢獻せる處頗る大なるものなり。

仍て同君は服部博士記念資金取扱規則第八條に據り服部賞金を受くる資格充分なるものと認む。

服部賞金受領者

海軍技術研究所材料研究部 佐藤 昇君

君は大正6年海軍技術研究所(大正12年以前は海軍造兵廠)に奉職し爾來20有5年に互り専ら金屬分析試驗業務に従事し今日に至る。

其の間業務上其の他に關し上司より表彰を受けたること數回に及べり蓋し分析技術に關する造詣深く且研究心旺盛にして刻苦勉勵不斷の努力を致せし賜に外ならず。

特に研究方面に於ては鋼材ガス分析並に現場分析等に關し海軍部内は勿論 學界各方面に貢獻せる處極めて大なり。

仍て同君は服部博士記念資金取扱規則第八條に據り服部賞金を受くる資格充分なるものと認む。

服部賞金受領者

日本製鐵株式会社富士製鋼所技師

製鋼掛長 穂坂徳四郎君

君は八幡製鐵所より日本製鐵株式会社富士製鋼所に轉じて十餘年、専ら鹽基性平爐製鋼作業に従事したるが、屑鐵不足對策として固定式平爐に於て冷銑鑄石法を行ふ必要を生ずるに及び同君はその實驗研究を擔當し、夙夜熱心努力の結果短期間にその目的を達成し熔解期に於て酸性鋼液を絶えず少々づゝ流出せしむれば爐床を侵蝕せらるゝことなく順調に作業し得ることを確め、同製鋼所に於ては一昨年初頭より自工場發生屑鐵のみによる85乃至90%冷銑鑄石法を全面的平常作業として繼續實施するに至れり。同君はこれに就いて一昨年初の日本鐵鋼協會講演大會に於て講演し且その論文を昨年一月の鐵と鋼誌上に發表し工業界並に學界に貢獻せる所甚大なり。

仍て同君は服部博士記念資金取扱規則第八條に據り服部賞金を受くる資格充分なるものと認む。

服部賞金受領者

株式会社日立製作所若松工場

鑄造課長 工學士 宮下格之助君

君は昭和4年東京帝國大學工學部冶金學科を卒業して日立製作所若松工場に入り爾來14年間専らチルド・ロールの製造に従事し、熱心にその品質改善に努め特に原料銑鐵の研究に於て從來チルド・ロール製造用として最も優秀なる冷風木炭銑鐵は熱風コークス銑鐵よりも窒素含有量少きことが特徴なるを確め、進んで銑鐵中の窒素減少方法を考案し、優良なるチルド・ロールを製造し得るに至りたるは本邦工業界のため大なる貢獻なりと云はざるべからず。尚銑鐵に對する窒素の影響に關する研究論文は屢々之れを鐵と鋼誌上に發表し、學界に貢獻せる所尠からず。

仍て同君は服部博士記念資金取扱規則第八條に據り服部賞金を受くる資格充分なるものと認む。

服部賞金受領者

日本製鐵株式会社八幡製鐵所技師

工學士 八木貞之助君

君は昭和8年京都帝國大學工學部冶金學科を卒業し、直に八幡製鐵所研究所に奉職し、爾來主として試驗用小形熔鑄爐の建設改良及び其の操業の研究に専念幾多の困難を排し 内容積の0.6m³試驗爐にて倭に日産一匙餘の出銑を見得る如き製銑研究をも行せり。

一度小型熔鑪の成功を見るや、之に依りチタニウム含有砂鐵鑪の製鍊を志し特殊なる酸性操業によりて之が利用法を研究し輪西製鐵所コークス吹熔鑪及帝國製鐵株式會社三成工場木炭吹熔鑪に適用し好成績を挙げたり。更に高礬土質の南洋鐵鑪 100% を使用し鑪滓中礬土 33% に達するも操業可能なることを確め、從來利用の困難なりし諸原料に對し其の利用法の途を開きたるは我が國製鐵技術に對し貢獻せる所頗る大なり。

仍て同君は服部博士記念資金取扱規則第八條に據り服部賞金を受くる資格充分なるものと認む。

香村賞牌受領者

日本砂鐵鋼業株式會社 取締役

工學士 上野建二郎君

君は昭和 2 年帝國大學工學部冶金學科を卒業後直に商工省大阪工業試験所に入り、翌 3 年以來砂鐵製鍊に關する研究に従事すること 8 年の長きに及び、其の間砂鐵中に存在するワナヂウム及びチタニウム等の分離利用に關する基礎的研究並に中間工業試験を行ひ同所獨特の砂鐵製鍊法を完成し當時 3 回に亙り其成績を大阪工業試験所報告として發表せり。

昭和 10 年 4 月同所を辭し當時此の砂鐵製鍊法を工業化するの目的を以て創立されたる日本砂鐵工業株式會社（後日本砂鐵鋼業株式會社と改む）に入りて親しく其の企畫に當り兵庫縣高砂町に試験工場を設立し、數年間フェロワナヂウム、酸化チタニウム、海綿鐵等の製造並に砂鐵を主原料とする炭素鋼及特殊鋼の製造に付き幾多の苦心を重ね遂に其工業化に成功し、現に高砂町及飾磨町に大規模の製鋼工場を經營しつゝある。

又同社は軍部の要望に應じ、高砂工場に於ける工業化試験の結果を基とし青森縣八戸市に砂鐵製鍊工場の設立を行ひ其第一次計畫たるワナヂウム工場は昨春完成し目下年々〇百噸の生産を舉げ本邦特殊鋼の重要資材たるフェロワナヂウムの大量生産に成功し、本邦需要の大部分を供給し得るに至れり。

以上述べたるが如く君は砂鐵利用問題研究の先驅者として巧み其の冶金學的及び化學的智識を應用し、以て此の成功を収め得たるものにして其の功績極めて顯著なり。

仍て同君は香村博士寄贈資金取扱規則第四條に據り香村賞牌を受くる資格充分なるものと認む。

香村賞金（第九條適用）受領者

株式會社 昭和製鋼所研究所副研究員

ドクトル、オブ
フィロソフィー 有山 恭藏君

君は昭和 9 年米國ミネソタ州立大學を卒業、11 年論文を提出しマスター、オブ、アーツの學位を受け、12 月「可溶性物質の吸着に就いて」なる論文に依り同大學よりドクトル、オブ、フィロソフィーの學位を受けたり。昭和 14 年株式會社昭和製鋼所に入社、爾來其の研究所員として今日に至る。

君は藤田守太郎君と共に滿洲國錦西地區に存在する錦州貧マンガン鑪の經濟的利用法に着意し、珪素-鐵-マンガン合金の製造に關する研究をなす次に鑪石の磁化焙燒の研究、酸化鐵と酸化マンガンの反應等に就き多數の實驗を繰返し更に之れに理論的考察と計算を行ひ遂に從來の選鑪方法とは全く異なる方法を以てマンガン 50% 内外の人造マンガン富鑪を作り、同時にマンガン 1~2%、珪素 0.2% の鉄鑪を經濟的に製造する方法を樹立せり。

要するに從來利用價値の極めて尠き貧マンガン鑪の利用に付き特

殊なる實驗研究を行ひ之を經濟的に處理すべき新方法を發見せるものにして、現下のマンガン鑪鑪に寄與する所極めて大なるものなり。

仍て同君は香村博士寄贈資金取扱規則第九條に據り香村賞金を受くる資格充分なるものと認む。

香村賞金（第九條適用）受領者

日本製鐵株式會社八幡製鐵所

鍛冶職職長 梶原 林次君

君は日本製鐵株式會社八幡製鐵所に入社以來 35 年餘、精勵格勤頗る研究心に富み、數多の發明考案を齎らし大に生産能率増進に貢獻したり。乃ち其の主なるものを挙げれば、平爐瓦斯及空氣變更装置考案、平爐瓦斯用開閉瓣の開閉装置考案、瓦斯發生爐石炭函カバーの改造、電氣爐々頂装入「バケツ」の開口装置考案、100 噸平爐 300 噸精鍊爐床直用運轉排滓器考案、平爐原料装入機の装入桿の尖端に簡單なる装置を取付くことにより天井修理の煉瓦積作業を容易且つ完全ならしめ爐の活用能率を高めしめたる考案等にして何れも夫々其の都度所長 社長及び全日本産業技術戦士顯彰大會々長、鐵鋼統制會々長より授賞せられたり之を要するに同君の精勵格勤と其の旺盛なる研究努力は作業上其の貢獻の甚大なるを認むるものなり。

仍て同君は香村博士寄贈資金取扱規則第九條に據り香村賞金を受くる資格充分なるものと認む。

香村賞金（第九條適用）受領者

株式會社日本製鋼所室蘭製作所職員

關 米助君

君は明治 41 年仙臺市立工業學校金工科を卒業し大正 4 年日本製鋼所に入社室蘭製作所に勤務す。爾來 20 年の久しきに亙り専ら部下を指導督勵して鍛造品の製作に従事せり。而して同所の創業より現今に至る鍛造技術の發達は同君の研鑽苦心に負ふ所極めて大なり。特に陸海軍兵器用特殊鋼材の白點等疵の實際的防止法の確立に對し貢獻せる所甚だ多し。又同君は昭和 14 年選ばれて米國に出張具に鍛造作業の研究視察をなす所あり其の豊富なる經驗と卓越せる技術とにより鍛造技術の向上發達に致せる功績は蓋し大なるものあり。

仍て同君は香村博士寄贈資金取扱規則第九條に據り香村賞金を受くる資格充分なるものと認む。

香村賞金（第九條適用）受領者

株式會社昭和製鋼所

工學士 原田 靜夫君

君は昭和 10 年東京帝國大學工學部冶金學科を卒業と共に株式會社昭和製鋼所に入社工務部、銑鐵部勤務となり昭和 12 年 11 月より 8 箇月間クルップ直接製鋼法の實習及製鐵事業一般研究の爲獨逸に留學す。歸朝後同社ルツペ工場建設に従事し大に貢獻せり。現に粒鐵課主任として其の卓越せる技能と豊富なる經驗とを基礎に製鐵用回轉式筒狀爐に於ける熔鑪爐滓使用に關する研究を完成し日滿二特許を取得し業界に貢獻する所頗る大なり。

從來回轉爐による製鐵法は其の形式の如何を問はず總て煉瓦の壽命短きこと附着物による熔成物吐出口の閉塞、使用燃料の多量、製品の品位の粗悪に惱みしものなるも本特許に據れば從來利用價値少き熔鑪爐滓を適當に使用することに依り其の利用價値を見出し熔劑使用量の 20%、使用コークス 32% を節約し得るのみならず安價な

る珪石煉瓦による長期連続作業に成功し且つ從來廢棄されし鐵分32%の貧粉鐵より鐵分97%以上炭素0.6%珪素0.3%なる鋼を一舉に工業的に多量に生産することに成功せり。

仍て同君は香村博士寄贈資金取扱規則第九條に依り香村賞金を受くる資格充分なるものと認む。

香村賞金(第九條適用)受領者

株式会社 昭和製鋼所研究所次長

工學士 藤田守太郎君

君は大正10年九州帝國大學工學部冶金學科を卒業直に助手より次で大正14年助教として製造冶金學講座を分擔せり。昭和10年株式会社昭和製鋼所に轉じ、爾來研究所に勤務し今日に至る君は有山恭藏君と共に滿洲國錦西地區に存在する錦州貧マンガン鐵の經濟的利用法に留意し、珪素-鐵-マンガン合金の製造に關する研究をなし次に鐵石の磁化焙燒の研究、酸化鐵と酸化マンガンの反應等に就き多數の實驗を繰返し更に之れに理論的考察と計算を行ひ遂に從來の選鐵方法とは全く異なる方法を以てマンガン50%内外の人造マンガン富鐵を作り同時にマンガン1~2%珪素0.2%の銑鐵を經濟的に製造する方法を樹立せり。要するに從來利用價値の極めて尠き貧マンガン鐵の利用に付き特殊なる實驗研究を行ひ之を經濟的に處理すべき新方法を發見せるものにして現下のマンガン鐵饑饉に寄與する所極めて大なるものなり。

仍て同君は香村博士寄贈資金取扱規則第九條に據り香村賞金を受くる資格充分なるものと認む。

俵賞金受領者審定書

俵賞金受領者

技術上有益なる論文

平爐に於ける珪石煉瓦の損傷原因と白珪石製珪石煉瓦の製造に關する研究に就て(鐵と鋼第28年第7號)

鞍山高級爐材株式会社技術部長 大野田 剛君

俵賞金受領者

學術上有益なる論文

電氣爐によるフェロマンガン製造の研究(鐵と鋼第28年第11號)

日本鋼管株式会社電氣製鐵所長
兼建設部電氣製鐵所支部長參事

工學博士 工學士 笹部 誠君

渡邊賞牌受領者

株式会社 日本製鋼所室蘭製作所參事

工學士 黒川慶次郎君

君は明治40年東京帝國大學工科大學造兵學科を卒業し、直に海軍造兵中技士に任ぜられ海軍造兵廠、横須賀及吳海軍工廠、英國駐在、艦政本部等に歴任して帝國海軍の造兵技術に貢獻し造兵大佐に累進し、大正13年株式会社日本製鋼所室蘭製作所に轉じたり。

爾來専ら製鋼技術の研究改善に従事し昭和6年以降は同所改良部長の要職に在りて卓越せる識見と豊富なる體驗に基き後進を指導育成しつ兵器用鋼材の品質並に製造作業の重要研究を相次で達成せしめ實作業に應用し獻身的努力を捧げ同所製鋼技術をして今日在らしめたる功績は極めて甚大なり。

直接指導せる技術研究の主なるものは熔解作業の改良鋼塊のゴースト減少白點及び砂疵の原因とその防止法熱處理法の改善防彈鋼及其の製法の改良、特殊鋼の材力研究等製鋼作業の全般に互り特に無

ニッケル鋼の重要性を唱導して10年以前既に試作研究を実施せり。又同所より最近約10箇年間に學界に發表せる研究の殆ど全部は同君の指導に依るのみならず昭和10年より同16年迄學術振興會第19小委員會の委員として同委員會の發達に盡瘁し、熔解、分析、高溫計器に關する多數の研究を發表し本邦製鋼界を裨益せり。

要するに右の如く多年に互り製鋼技術研究の指導者となりて理論と實際との兩方面に於て製鋼事業の發達に貢獻すると共に多數の研究者を育成せる功績は極めて顯著なり。

仍て同君は日本特殊鋼株式会社寄贈資金取扱規則第四條に依り渡邊賞牌を受くる資格充分なるものと認む。

渡邊賞金受領者

日本特殊鋼株式会社 技師 阿部七三郎君

君は大正11年東京物理學校を卒業し、同年日本特殊鋼株式会社に入社同年より昭和8年に至る間東北帝國大學金屬材料研究所に於て各種の研究に従事したり、同年會社に復して同社福壽研究所々員として専ら特殊鋼の研究に従事したり。

當時一般に未だ研究せられざりし窒化鋼、弁用鋼(耐熱鋼)及曲軸用鋼に關し研究をなし之等重要特殊鋼の爾後の進歩發達の基礎を作りたる外優秀なる耐酸鋼の研究を完成し專賣特許を得たる等、多數の研究をなしたり。

昭和7年以來は同社熱處理工場の現業に従事し、其の主任として研究により得たる蘊蓄を傾け熱心よく工具を指導し、整然たる作業方式により優秀なる成績を挙げつゝあり。特に數年前本邦航機大型發動機用曲軸の滲炭及熱處理の研究を完成したるは同君を以て嚆矢とす。之によりて、我國航空發動機生産に貢獻したる事甚大なり、又防彈鋼板の滲炭及び熱處理の改良進歩に盡す事極めて多大にして、君の如きは實に研究及作業方面に互りて、特殊鋼の生産に改良に貢獻したりと謂ふべし。

仍て同君は日本特殊鋼株式会社寄贈資金取扱規則第五條に據り渡邊賞金を受くる資格充分なるものと認む。

渡邊賞金受領者

日本製鐵株式会社八幡製鐵所技師 入江 仁壯君

君は大正13年旅順工科大學工學部專門部冶金科を卒業し、同14年2月八幡製鐵所特殊鋼部に職を奉じ、爾來18年間主として特殊鋼の生産部門を擔當し、其の間技術的の功績甚大なり。

即ち昭和13年彈丸鋼直送熱壓延法に就き特に造塊注入法を改善工夫し之れに依り從來最至難とされたる片直送作業による鋼材表面疵を減少せしめ以て角型鋼片直送熱壓延法の先鞭を付けたり。又弧光式電氣爐に依る4%級珪素鋼の熔製法に於て特殊脫硫配合劑を工夫して急速なる湯熱の上昇を計ると共に鋼滓の調節を簡單容易にし還元時間を著しく短縮し高級珪素鋼の連續熔製作業を可能ならしめたるは勿論爐體の生命を倍加し成品の改良と其生産量の増強に努力し我國電氣鐵板の要請に貢獻する所甚大なるものあり、更に又大型弧光式電氣爐工場の建設に努力し、從來大型爐に於て熔製至難とされたる高級特殊鋼を多量に熔製し優秀なる成績を擧げて我國に於ける代表的な大型爐の操業に一新紀元を樹立せり。

以上の如く作業上に於ける功勞多大なるのみならず特殊鋼製造並に工場建設に關しては特に卓越せる技術と識見とを有すること明かなり。

仍て同君は日本特殊鋼株式会社寄贈資金取扱規則第五條に據り渡邊賞金を受くる資格充分なるものと認む。

渡邊賞金受領者

日本特殊鋼株式会社 技師 塚本 榮一君

君は昭和 6 年福井高等工業學校機械科を卒業し同 7 年日本特殊鋼株式会社に入社し爾來専ら鍛造工場に勤務し、主として航空機用鋼鍛造部品の製造に従事す、當時我が國航空工業は其の搖籃時代にして、之に用ふる鍛造品製造は最も困難なる時なりしが、君は資性熱意あり職務に熱心勤勉にして、然も創意工夫に秀で特に實行力に富めるを以て克く此の艱難を征服し幾多の改良進歩を完成したり。

殊に航空發動機用曲軸の鍛造に關しては其の鍛造方式及び型に工夫考案を凝し、其の改善によりて曲軸鍛造品の内部組織を良好ならしめ、従つて其の機械的性質の向上をなしたるのみならず最近に到り戦時下要望せらるゝ生産能率をも著しく増大し益々我が國航空發動機生産及び進歩に貢献せる所多く其の功績甚大なり。

仍て同君は日本特殊鋼株式会社寄贈資金取扱規則第五條に據り渡邊賞金を受くる資格充分なるものと認む。

渡邊賞金受領者

吳海軍工廠製鋼部鍛工長 本田登喜二君

君は明治 38 年吳海軍工廠製鋼部に入廠果進して大正 12 年海軍技手に任官し昭和 4 年依願免官となりしも直に工手として入廠部内限判任官を以て待遇せらる。前後通計入廠以來實に 30 有 7 年製鋼工場或は研究係に於て特殊鋼材の製造並に研究實驗に従事せり。殊に大正 8 年以降は専ら重要特種鋼材の熱處理作業を受持ち其の獻身的旺盛なる努力心は明晰緻密なる頭腦と相俟て所命の重要粗材製造に關し研究時代より上司を輔佐し一意専心不斷の努力を傾注し幾多の苦心を嘗めこれに改善を行ひて遂に今日の精妙を致し、今次戦争にも直接効果を擧げつゝあり、その功績は甚大なるものなり。

斯くの如く永年に亙り帝國海軍に貢献せるところ大なるのみならず特殊鋼の進歩發達に資する處又極めて多し。

仍て同君は日本特殊鋼株式会社寄贈資金取扱規則第五條に依り渡邊賞金を受くる資格充分なるものと認む。

V 日本鐵鋼協會春季大會晚餐會記事

日時 昭和 18 年 4 月 3 日 (土祭) 自午後 6 時 至午後 9 時
會場 東京市麴町區霞ヶ關 法曹會館
會費 金 5 圓

1. 出席者 (順位略)

招待者 (來賓)

日産自動車會社々長 淺原 源七君 代理 久芳 道雄君
宮製鋼所社長 高妻 俊秀君 日本製鋼所社長 杉 政人君
日本鐵鋼工業會社々長 高橋 省三君 三菱鐵業研究所 冶金第三課長 本多 顯曜君
日本石油鶴見製油所長 馬力 誠司君 電氣學會長 正木 良一君
日本金屬學會長 本多光太郎君 燃料協會々長 水谷光太郎君

(表彰者)

阿部七三郎君 有山 恭藏君 岩屋 枝彦君 入江 仁壯君
上野建二郎君 梶原 林次君 黒川慶次郎君 佐藤 昇君
笹部 誠君 關 米助君 田澤敏次郎君 塚本 榮一君
穂坂徳四郎君 本田登喜二君 宮下格之助君 八木貞之助君

(講演者)

阿部 三郎君 荒木 逸夫君 池ノ上 典君 市來崎 進君
内田 新八君 海澤光三郎君 上田 滿正君 大原三代喜君
垣内富士雄君 川口實之輔君 河合 正吉君 河合 正雄君

柏原 方勝君 木戸 行男君 北川 良也君 後藤 秀弘君
佐野 正夫君 下田 秀夫君 下川 義雄君 竹内 久祐君
田尻 仁郎君 谷村 照君 高島徳三郎君 武田 喜三君
寺町 忠夫君 長崎 勸君 中村 春三君 早矢仕 功君
萩原 巖君 樋上 倫久君 堀田 秀次君 牧野 恒光君
嶺 次男君 森脇 和男君 山縣 謙一君 矢島 忠和君
柳橋 哲夫君 吉城 肇君

(實行委員)

菊池 浩介君 齋藤 彌平君 志村清次郎君 田中 清治君
藤田 忠男君 横山 均次君

出席會員 (次第不順)

松下 長久君 三島 徳七君 河村 曉君 水谷 叔彦君
齋藤 大吉君 渡邊 三郎君 川上 義弘君 吉川 晴十君
網谷 俊平君 池田 正二君 石原 善雄君 志村 繁隆君
藤村 哲之君 村上武次郎君 齋藤 三三君 金谷 三松君
廣瀬 政次君 石原米太郎君 金子 恭輔君 的場 幸雄君
藤原 唯義君 高瀬 孝次君 朝倉 希一君 青木 元直君
足立 逸次君 今井 文平君 伊藤 實君 石塚幸次郎君
伊藤 寅視君 裏川 康一君 梅津 七藏君 江原 浩介君
小田 繁君 大垣 梅雄君 小關 誠君 太田 展弘君
小田村嘉穂君 小畑菊次郎君 壁谷 眞蔭君 嘉村 平八君
黒田久仁男君 後藤安太郎君 小高 義通君 小林 智教君
近藤 正光君 小林 忠敬君 小松次次郎君 酒井 四平君
鈴木 鐸明君 杉本 正邦君 世良 忠君 大同製鋼會社代表 安藤 政次君
田中 武次君 田中 福治君 大同製鋼會社代表 高口 清君
竹中 哲哉君 堤 彦一君 外村 徳三君 市谷 源衛君 東海電極製造會社代表 植田 勇二君
東亞鑄鋼會社代表 古田 堅志君 渡嘉敷眞男君 長岡 繁君 中村 幸雄君
日本鑄鋼會社 住 榮三君 日本電解製鐵所代表 西垣 一正君 長谷川幸平君
濱 弘君 原 茂樹君 福留 富治君 古村 滿澄君
松田 太郎君 松浦 春吉君 松本徳三郎君 宮原 毅君
宮製鋼所代表 久保 喜内君 見須 二郎君 諸住庄太郎君 山内 弘君
吉田 太郎君 渡邊 貢君

2. 卓上演説記録

松下 長久君 (日本鐵鋼協會々長) 一言御挨拶を申し上げます。第 28 回の通常總會と第 29 回の講演大會を開きました所、非常に盛會でございます、會員の御申込數が 1200 名に達したやうな次第であります。先刻總會の時にも申述べたのでありますが、此の戦時下鐵鋼の増産並に此の鐵鋼を使つて戦力増強を致しますことの益々必要なることを痛感せられまして、鐵鋼界に御關係のある方が斯く多數御參集になつたことゝ存ずるのであります。斯様に多數の御出席を戴きましたことに付きましては、會として非常に光榮に存じて居ります。此の機會を利用しまして、今晚晚餐會を開いたのでありますが、時節柄洵に粗酒——と申しますと、お酒が出るやうであります、お酒は無いのであります。冷いサイダーと粗肴でありまして、此の點、金谷主事が非常に御盡力になつたのでありますけれども、斯う云ふ時節柄洵に残念であります、惡からず御諒承を願ひたいと思ひます。當鐵鋼協會に常に御關係のある各學會の會長さん方を御招待申上げました處御出席下された事を光榮に存じます又明後日から見學を御許し下さいました各會社の重役方、所長さん方を御招待申上げました所、時